ひまとさきる身で有るがら年の暮
餅搗や邪广を手傳ふ人二人り
住む人の有るとも見へを冬至梅
あつらへた夜の明ふりや雪の窓
五時瀧車は乘り後れたり夕吹
螢より効多し窓の雪
枯れる程月の離れる柳哉
起る程客の喜ふ火鉢哉
物の影移さぬ斗り雪明り
渡し舟待間の遠し寒さ哉
柳かと傍に寄る間に枯にけり
しつかりと今日一日の小春哉
惜し子の鹿相致しぬ此寒さ
一寸出て長き話しの時雨哉
行年や過し昔しの懐かしき
野も山も白しからりと冬の月
日のはかりばかりと開らく冬の梅
わんばくの勝聲揚けし雪軍
時雨るゝやや見てさへ淋し木の鳥
木枯の淋しや軒の鈎干菜
煤掃や逢ふ人毎の笑ひ顔
袴着や五ツの道のふみ初め
よき事は先へ開かせる紙衣哉
浮れ出て野風の寒き小春哉
消安き物あは潜し籍の花
月白ふありて更たる寒さ哉
猿叫けふ聲さへ虔し冬の月
鉋木あ思ひ重ねて積る雪
親子して起し合けり雪の竹
物影もなふて尖し冬の月
具をゞに道の付けり雪の原
行通ふ戸口の氷柱折られけり
水口は殘して池に薄氷
氷るらん筧は時々にたゆる音
廣ろ〳〵とせぬは常なり冬座敷
賣聲を惜めて買けり飾松
頼んは買はれぬ歟や年市
炭箱をかゞしとなをや寒の梅
家主も知らぬすきあり此雪吹
鹿々でも客に馳走や置巨燵
日の中は汗の出るらし雪達广
我が物と思ふも邪广なり下駄の雪

鳴く茶釜雪を叱つて待せけり
淋しさや雨が敷き込む落葉音
上げて來て門あ乘てけり笠の雪
我が山の現れて降る時雨かな
貸し借のあき身ど安し年の暮
待ち勞れ見せて火を繼く火鉢哉
客去た後坐に直る寒さかな
水鼻を孫が敬ふる寒さ哉
歩み行く前よりか、る寒さ哉
イめば花見し山の落葉かな
とちからも奇麗に見ゆる雪の山
ひと世界別のやうなる巨燵哉
山鳩の羽叩くのみぞ冬の山
木がらしやされと梢は打れるせを
存命で日和に合ぬ冬の繩
泰平の世とはありけり煤拂
茶の花や咲も凋みも幾日立
寒念佛是れも浮世の勤かな
大雪に杖かしにけり松の枝
薬の落た木に吹風も神無月
松島 暦望小春日や渉りて見たき千賀の浦
此振りを書き置きたし松の雪
世のならひとは言ふのみぞ大三十日
吾が年を笑ふて見たり年の坂
初雪や竹に六尺木に二寸
麥時や無事あわらべの歳問はる
座蒲團あ居直り待や鶏の聲
亞米利加と大和は蔦の麥哉
蟬や波ふむ夢のさめて又
芭蕉翁像前ニ題ッキテ
心只是日是時初時雨
國の富よりや越ゆまじ年の市
水賣乃寒さを語る初氷
泣癖の子も行儀振る鉢叩
橘を子がさ、げよと淡山忌
一ッづ、春あ移るや除夜の鐘
蕎麥賣の行燈くらし夜るの雪
鮫鯉や殊に目出度き名なりけり
きり外を障子の紙も師走哉
盗人も妹と寐る夜や鳴千鳥
刻炭あ咄の落を取られけり
煤掃て茶を焚庵や四疊半

節季候の帶見事なり京の市
子はほしきものよ巨燵の右左り
雪時雨たのしかれとや草枕
日の惠み願ひ通りや歸り花
何となく浮む小春や海の上
時雨舍や月もいましてひとしくれ
垣の雪降り崩しては積りけり
雪國の雪をゆとりや松の色
雪の夜やたまさかしても雪の音
炭繼で月を見よ出る庵りかな
威氣こめて居る番广や冬の月
茶の花も都に近きゆとりかあ
辻君の獨りふり行く寒さかあ
古墳や時雨に光る苔は鬚
子と思ふ親は抱き寐の寒さ哉
小春野や霰むはかりの未刻日和
降りたらぬ雨風となりにけり
冬籠る敷へ見せけり袋蜘
雪ちるや木曾の旅籠のいく寐覺
更る夜の鐘や湯婆の撫でて、ろ
孤火は岬に消て小夜しくれ
山鳩の餌につく雪の戸口かあ
朝市の午時を過きけり年の市
鞦や血も吐そふあ柘榴われ
隅田の花頃は過くまし胼手哉
寒蒜や垢の溜りし耳のたは
我か育てられし蒲團の厚さ哉
家鳩の啼きめくる笹の溢を中
隠し喰ならぬ生海鼠の欠伸哉
言の葉も交る木の葉の時雨哉
置火燵憂寐旅出の初めかな
死集金預けて厄の柚味噌哉
多羅尼經三條り程の納豆汁
果もなくのつべり廣し冬の月
何の里もをなじ姿ふ枯野哉
殊の外靜な夜あり積る雪
蚤虫も添た儘なる落葉哉
一ト年の油斷ふ世話し大三十日
旅人も落付貝よ宿の雪
落葉して窓あさし込月夜哉
限りなく一ト夜あ咲や六ッ花
氷る夜や磨たやうな月の貝

初雪を花あして出る植木賣
炭碎く音に起るや村雀
水鳥の影も動かを隅田川
イめば物音もなし冬の月
水仙の花に疊りは無りけり
水仙や寒の障らぬ花の意地
古井戸も埋もれて居る落葉哉
賤が家の烟りも太し雪の朝
荒涙に馴れて能く繼ふ千鳥哉
雪積みや小窓明くれば鳥の來る
手短かに書た手紙や年の暮
漁車烟り斗り小春野日蔭哉
初雪や燈臺までは富士の裾
富士の雪神代の上に降にけり
廚見へて帽は重し雪の暮
薄學になる見通りぬ今朝の雪
雪時雨〳〵て富士の月夜哉
富士は不二木は木に冬の姿哉
寒菊に屈き兼つる日脚哉
落葉して月影覗く庵の窓
掃除して庵相あ塵を雪の上
染たらぬ樹もある中を散る紅葉
春めきし日和續きや笹子啼
月の外ものなき池や番ひ鴛鴦
口切や梅提て來し僧ひとり
結はれしまゝに枯たつ柳かな
凡や一聲走る三井の鐘
賑やかに降て暮けり里の雪
鉄洗ふたけ搔わける落葉哉
冬の月柴火の酔を醒しけり
雪まても降て賑わし年の暮
米搗の黐買ひに行く雪日哉
梅もはや片笑窪ある冬至哉
大年や梅にはぬくき日の當る
いろかしや毎日年の行く斗り
新らしき咄も持ちて暦賣
死をきめたあこやの琴や初時雨
恨み寐に蒲團引かる、火燵哉
急き來てそつと叩くや雪の木戸
鼠追ふ音の聞ゆる寒かな
ぬつきりと枯て折れぬ柳哉
枯て迄青野が原や夢の跡

みのなくも歌に實のある鹿野かな
豆打や厠はこゑの出し納め
竹火箸縮む夜伸る氷柱かな
徒らな子らし健氣な雪礫
袴着や紐まで千代の石だゝみ
月一ッ懷にして落葉川
登り窯小春の夢を流しけり
仕事場に幅のきく身や革羽織
濡れ衣とあるや時雨の持合傘
不足なき身よる師走の不足哉
鶯の來て靜なり冬の梅
裾に引く雲を枕や眠る山
山二つ掻き集めけり落葉かな
遠く鳴く千鳥に近き夜明かな
初霜や仕舞忘れし植木鉢
鶯屋とは寒さの違ふ板屋かな
雪空と見ては汲み足す茶水かな
捨るにも心違ひや鰒の腸
遠く行く漕き振りてなし雪見舟
ついそこも心に遠し雪車の道
返り日のさゝや紅葉の散る小口
時雨行く跡に見出しぬひるの月
霜やけやかわりし下駄の履てゝろ
酒の氣はとらさぬ顔や綱代守
妻なしは余所の里なり蹇巨燵
聊の芋に蹇あり小夜時雨
古しんの細る寒さや蹇らんぶ
羽ねたゝく鶏から起て煤拂ひ
手扣の外に眠のつく年の市
鼻嫁に早く見せたや梅の香と
鼻むこのかいで見たがる梅の香を
鼻むこに早く見せたや梅の香を
盲人も鼻にて愛する梅の香を
見の人も鼻めで愛するゝ梅の香を
ひまな身に油斷のならぬ鳴子曳
待てと來をひとりぬるよの寒さかな
ぬをまれたたゝとで鳴りし鈴の玉
かくしても中からしらぬ鈴の玉
盗人もかくしょのなき鈴の玉
はつ霜や眠につき易き庭の塵
しくるゝや空は月のありなから
明て見る夜半のさむさやはつ氷
水桶あさむさのみゆるこはりかな
はつ霜やみるたびつもる身の齡ひ
先に立供も忠あり雪の中
水瓶の氷にわるゝさむさかな
獨り寐る孫に氣のつく寒かな
骨折を見て通られぬ落穂かな
ほと〳〵にのぼれば易き年の阪
一寸覗き厠で見るや梅の花
立ぞまり呼ぶかと開けば蛙かな
鼻出した樣に地藏の氷柱かな
松竹の我慢を折し今朝の雪
肌寒さ風れすごつく糊糊神
掃寄せた樣に軒端の霰哉
叩かれて目出度さ配る神樂かな
假葺の苦や氷柱の長短
火を附けて側で手を打左義長かな
開く時木の實結ぶや梅の花
寒中に汗を流して稽古角力
寒中にはだかで汗や風呂の中
乳母も呼ふ一うそ出來た寒の餅
歳末に行かれぬ程の積り雪
樣先て見るともあえの雪見哉
一年の搗きしまいなり暮の餅
ねまえがへ何をたよりよ炬燵か
天地に炬燵入れたし此の寒さ
右左りそちらもよしや頬冠り
雪に雪ゆきに行かれぬ雪の中
冬あがら雲に春あり花や散る
ふるふ程なはふりつくや袖の雪
年よれゝ色はかはらぬ冬の月
三日月のかくれて後や雪あかり
片袖に顔を隠そや雪しばき
枯草も八重の根をさゝ度々の雪
ゆめさめて炬燵を聞くや明け烏
今日もまた一輪咲きて室の梅
白雪のながめも清き日の出哉
月の出に光をかへそ冰かな
昨日ふりて今日雪たゝ松の雪
雪降りに靜かに聞ゆる笹の音
霜がれしはせをの根も殘りけり
冰をば割りて清めん手水鉢
火も消へて淋しきことは京都哉

身は居ても心据らぬ師走かな
木曾山は雪も見へけり小春風
初厂や月は其儘雨のあし
猫一ッ留主の火燵を守りけり
稀に來る人なつかしや暮の雪
大木の空に降り止む時雨かな
海鳴て一夜たもたぬ小春かな
江に移る月に限なき霜夜かな
手を掛て嫁の笑顔や大根引
淋しさや馬のいな鳴枯野原
炉開や手元に一つ夜なの蠅
空晴て波音高し渡る鴈
寐て聞は隣も遠き礎かな
乘まてゐして時雨や軒の馬
初雪や遠い島から夜の明る
行燈の光りそゝるとき寒かな
寒菊の露となりけり湯の煙り
鴨鳴や燒明臺の灯の勢ひ
雪の日のわやなく暮る、廣野哉
茶の花や明ふて摘た畑ゆかし
枯柳池にとじつく氷かな
品評會にいのこの餅や四郎右衛門
凡やこゝらで止まれ千里濱
さゝ鳴や法り諳み習ふアイウエオ
燒草の跡や顔出を蹄の塔
鉢叩きかゝも子もなし世は自由
肩衣の世を脱かへて紙衣哉
五十九ノ年暮
寄る波の皺や六十路のたばねのし
初霜や鶯鶯染形の置蒲團
松か枝も尖く更る冬の月
旅をして袖も時雨る、夕べかな
宿引のよいとめしはや夕時雨
春咲かぬ梢にもみつ雪の花
招かれつ招きし果や枯尾花
旅籠錢きめて拂ふや笠の雪
常釜のたぎる一ト間や冬牡丹
鬢も霜置添ふる夜に綱代守
凡や戻つて酒の醉を知り
報謝出を手も厭ふ夜を寒念佛
柊の花やそゝるぞき薬にも似ぢ
かきくゝる羽遣ひ世話し三十三鳥
松風のはげしき峯や冬の月
香も醒めて腰につやあし枯尾花
たつた今星見て寐たに時雨哉
日や月の惠みは余所に室の梅
咲かけて幾日よなるぞ寒椿
降る物のすくなき年や冬の梅
遊ぶ子の暮より大かい雪丸け
しめる戸の外は春あり大三十日
せまくなる座敷もうれし餅延
降る雪の中に豊かや餅の音
釜の湯もたきりて時雨開く夜哉
酔ふ程の人は來て居ぢ歸り花
あとへ咲く蕾としなし歸り花
忘れさる寒さ尊とき十夜哉
苦は酒に預けて樂し年忘れ
夜に聞ひた音を今朝見る落葉哉
ふぐの友にげて寐やそゝき毎夜哉
事足れば足るでいそがし年の暮
雪の谿通はゝ梅の操かな
よゝき夢のさめて醒けり敷巨燵
國壹岐て見て阿房津に甲斐る美濃つらき
雪降りや玉の汗かく車引
雪道に下駄は後にと殘りけり
寒かろと思へゝ開く雪の窓
大三十日町の娘が鬼の役
宵の内思はゝ積る朝の雪
大關も小股取られて下駄の雪
盗人の跡かくされぬ雪の道
暇乞して立兼る火燵かな
手にのせて見る間儘やはつ氷
退け雀今朝は我れ見ぬ竹の雪
子祭や貯金仲間の呼れ合
辻堂の有て淋しき枯野かな
たのまれて出來ぬ仕業や雪達摩
山茶花や訪來る蝶も曾てなし
荒浪や列の亂る、磯千鳥
春の樣何處へ行しや枯柳
夕はゝて錦散り敷く紅葉かな
影法師のそひへて寒し冬の月
出はなれて一人淋し冬の月
つい消る景色は見へぬ雪の庭
月ならて日を見て消ゆる雪兎

寒腹へ熱ひ物食ふ寒かな
初時雨一寸宿かる松の山
嗚呼是は何とも諸へぬ雪景色
冬の月野道の友はさき一ッ
惜む燈は消て主の起はじめ
薄月のするどくもみしかれの哉
日の本の花の花とはさく櫻
行々は我子の爲や人の世話
捨られた身に巡り逢ふ蛤杓し
炭はせて夫婦喧嘩もすみとなる
炮樂や豆でいる夜の御年越
猫か猫抱いて小判の稼かな
寺男極樂さうに勤めけり
三番叟踏ではいるや雪の下駄
味噌蛟河富士の雪汁甲斐煮をつ
貰ひ來て松竹梅と湯のわつさ
竹の雪人の心に懸りけり
月入て四面白雪の光りかな
かいわいて黒木は見へそ雪の山
行合ふて片足よける雪の道
松の葉の巡のまさりし今朝の雪
花の雪かつきてわらふかん椿
初せこはだゑにおひの雪見かな
手廻しをしてもいそがし大三十日
かべあなのさむさみにしむ雪の屋
ホかげよりはかべはふちゑ花の白ら雪
寒心や嫁か持參の新蒲團
楚軒を外して蕎の浮寐かな
今日こそと下女も手をうつ年忘
水底に影の深さや雪の山
駿崩す人も見受けぬ火桶かな
落葉して梢に殘る宵の月
明日まだとわかる、友や鰕と汁
初雨や國に入もる海の上
日に乾して寒心のよき蒲團かな
娘氣も離れた振りや煤拂
物問へは耳を敎へる紙衣哉
巨燵から店の戸ゞり尋ねけり
御寺出て懷さかを頭巾哉
赤足袋や歩行て來たを裘らるゝ
鰕の友春戸からそつと招きけり
息らぬ身は越安し年の坂
豊さや師走の門に飜れ米
眼自慢に暦見て居る紙衣哉
冠らせて笑顔覗くや子の頭巾
出ぬ思案出を顔乘せる巨燵哉
初雪や田舍娘の薄化粧
御内かと問はれて羞し雪の朝
雪の朝妙あ處に置き巨燵
庭の雪踏みわをろふて椽の端
轉げても氣の毒がらぬ雪の中
塩車の德東海道を雪見哉
此上は積みよふもなき竿の雪
篤はまだ寒ひがるに梅の花
遠ち近ちの山はは〇げ〇〇かみ〇月
月ばかり梢に殘る冬の明
はうし着たをかたや雪の鬼かわら
ちよとよりて去りまの無き巨燵かあ
柴うりにきく初雪のうわさかあ
みそさゝ、ひ這入るや崖根の鬼の口
池に落きり〳〵と舞ふ木の葉哉
夕くれの梧時にをこし石不踏
木からしや塩船は濤を蹴て行
我宿と思はさりけり雪の景
留主の垣覗て見るや水せん花
ゆき漬て世界のふりをかくしけり
柱より太き榾たく小家哉
大雪やひさこの米をたきつくし
居酒屋へ忘れて出たる寒さ哉
工みなきき子のたくみなり雪たるま
戸はあけてあれゝ留主なり山の神
はなれ家も搗音つゝく年の餅
廣き野へ出る程せまし雪の道
落さうに見へて根つよき氷柱かな
こわい物見たき心やふぐと汁
とちらから見てもひんよー雪の不二
蓑虫も日和覗ふ小春かな
犬の子の臥かねて泣く夜寒哉
日のあたる窓の障子や冬の蠅
大霜に衰れさつくを野菜畑
給心もあるか火鉢の灰せゝり
親の眼をしはし忍ひて雪轉
徐念なく膝に見の寐る榾火哉

雪積て國の境ひはなかりけり
隣からこの樹を惜しむ落葉哉
落葉掃く乞食も年の用意かな
いそかしい中にゆたかや餅の音
夜もそから風の聲きく寒かな
水鳥のはらふ羽音や夜の雪
餅つきの音の血ふや在所町
知ぬはと結搆はなし鰕汁
遊慮するよめのやさしき巨燵哉
奇麗さに喰てもみたき今朝の雪
焚火して何を笑ふぞ冬籠り
うた、ねをふと起さる、寒哉
辛抱はて、に有りけん雪の竹
子が親と叩くも孝の蒲團かな
どちらから笑ふぞ煤の貝と貝
冬の蒔く寒の種や玉霰
た、まさに雪の傘見しけり
庭に月しづめて浮ふ池の鴛鴦
月影の氷る真砂や鳴千鳥
浦なれて千鳥鳴なり月の須广
格子窓細目に見るや冬の月
影踏は霜に聲あり冬の月
日に影もちゝんで寒き釣乾菜
木口から嘶はつる、榾火哉
着重て足を忘る、寒さ哉
梅畑に杖曳延ばそ冬至哉
母親の賜の厚き蒲團かな
夜の更て炭も衣を重けり
た、まさに雪の傘見しけり
ゞ主に操立て待夜の寒かな
立迄は居るとも知らそ雪の鶯
寄り合ふて冷たくしたり置てたつ
一日にせまつて出るや寒見舞
一輪に折る枝太し冬の梅
音のおき時か盛りや夜の雪
分別の相手にもなる火鉢哉
姉は早よそのの人也年忘れ
埋れて春待つ雪の山家哉
風の相手にならぬ柳かな
冬の梅人の油斷に咲にけり
留主番のふるいつくしぬ炭俵
裘る間に逃る小春の日南かあ
子と杖にして越安し年の坂
畑にも鳴く蒲汐の千鳥かあ
炭つぎに出て盃をさゝれけり
馬呵り〳〵時雨る、夜道哉
白粥の甘味覺ゆる霜夜かな
鰕喰ふて存分腹をさそりけり
鳴啼や追ひ〳〵つのる雨の音
飛かして居直る雪の雀かな
訪ふ笹の人に纏き足を炭火かな
見て居れは光の付くや山の雪
掃わけて神の膳置く落葉かあ
野にも寐し旅もして來て冬籠
炉開きや二人の親を客こゝろ
神の木へ時雨に戻るからそかな
雪深し鴉の聲も聞かぬ暮
寐た鳥の照り透されて冬の月
寒梅や力一杯見せて咲く
網代守月にも晒そ白髮かな
大家から出たふりもせそ雪の人
雪の家無事一筋の煙りかあ
時雨る、や燒蛤の書旅籠
雪に手を突た跡ある關家かな
訪はる、と見て待遠し雪の人
旅の夜と思へは輕き蒲團かな
涙を這ふ煙の煙や夕時雨
鰕提て覗はくらき我家かな
窓一ッ月と時雨の庵かあ
温石のさめて聞けり啼千鳥
一人つ、出る顔寒し煙上り
橋立や松に消込む朝千鳥
鰕の友心に春は無りけり
月の瀬へ出て流る、小鴨哉
客一人り止めて煙るや雪の家
森の灯の見へては凄し冬木立
利ければよし利ねば桑餘藥喰
水鉢にしやこ入れた留氷りけり
いでたちは總だそきなり煤拂ひ
もの學ぶ道も早めて師走かな
雪あたれ傘の輕さや寒の雨
早咲きや生たる花器もつゝら形
なた使ふ腓も打割り大工かな

雪れ日や廓と伊達乃長柄傘
口吾種蒔きゝり雪れ積る朝
積遂さ雪より起るあらし哉
昇眼る旭乃和らかし雪れ上
作り手ゑ覺へぬ雪れをゐく哉
無理ならぬあゝ嶽や雪れ掛瓜
墨染乃町とも見へし雪れ朝
既夜とはなれて花や松乃雪
他力たけ大きゑしたり雪佛
匂ふかと思ふや雪乃初あはし
和らかゐ雪ゑ渡るや暮乃鐘
人形家れ子か上手なり雪細工
刎上た音和らかし雪の竹
國ゆかし雪ふるゑつけ止ゐつけ
浴室へ荷ひ込けり雪乃竹
思ふ夜の雪や咄しも積るほど
花も實もある靜さや雪乃暮
松風乃手ゐしむ朝や大根引
冬牡丹主も崇められゐけり
舞せたき蝶々もがな冬ぼたん
太さうな薬ふり見て引く大根哉
一輪ゐ幾客も來つ冬牡丹
柳よしまつよし雪れ向ふ島
金屏ゐ寫さゝや此雪れ松
花鳥れ世を待つ雪れ山家のあ
松は夜柳もゆきの旦かあ
木屋町ゐ居剛染のつく雪見哉
降り暮て雪ゐも音れ有る夜哉
須磨の客雪ゐ簾を捲せけり
友はしさ日也雪見の一人酒
雪れ人酒屋尋ねて通りけり
雪の山月乃出てから暮ゐけり
下駄叩く音と雪らし夜るの門
雪れ茶事不参の使酔しゝり
行冬ゑ翠り殘ーてかれ柳
只高ふ見る外となし雪れ山
酒賣も來るや鯨の見ゆる浦
冬もよき構や庭乃米俵
姥捨乃昔語りて巨燵哉
寒付かぬゐ温石さめる霜夜哉
炭匂ふ窓やいかゐも物靜
初霜や昨日晴たる麥れ上
年五十頭巾も似合初めゑゝり
老たりと知るや霜夜の膝頭
松ゐ旭のか、やく霜乃夜明哉
麻をうむ業ひ淸し雪乃家
雪れ朝旭と遲かれと思ひゝり
靜され重る音や夜乃雪
鶯黑し鴉と白し雪野原
橋立の噂も仕たり雪れ松
氷る夜や老たりと知る膝頭
膝かねと玉も瓦や寒稽古
弦ゐも木の實乃交る山家哉
酒機嫌くつより頭巾忘れけり
初雪乃戸ゐ來て居るや樽拾ひ
寒垢離の顔へ惠みの旭哉
風呂吹や脫て忘る、冠り物
冬籠り問ふや茶の友圍碁の友
草臥し足くつろくや樽乃傍
十月や賑ふ寺ゐ寂る宮
高臺や雪ゐと、まる朝景色
冬木立寒鳥も見えて月高し
初雪や若人と車老と杖
恙なふ貢も濟んて年忘れ
半日と機も休みて大根曳
此日和翌日もありたし大根曳

愛白猪蓼集

終

明治二十六年十一月十七日印刷
仝　年十一月廿一日發行

大阪市南區末吉橋通四丁目八十六番邸
編輯兼發行者　大淵渉

大阪市西區土佐堀裏町四十番邸
印刷者　村瀨時

大阪市南區心齋橋北詰八十六番邸
發行所　駸々堂

ج ۱۹۴

特 22
841

新撰 発句拾万集 下

国立国会図書館